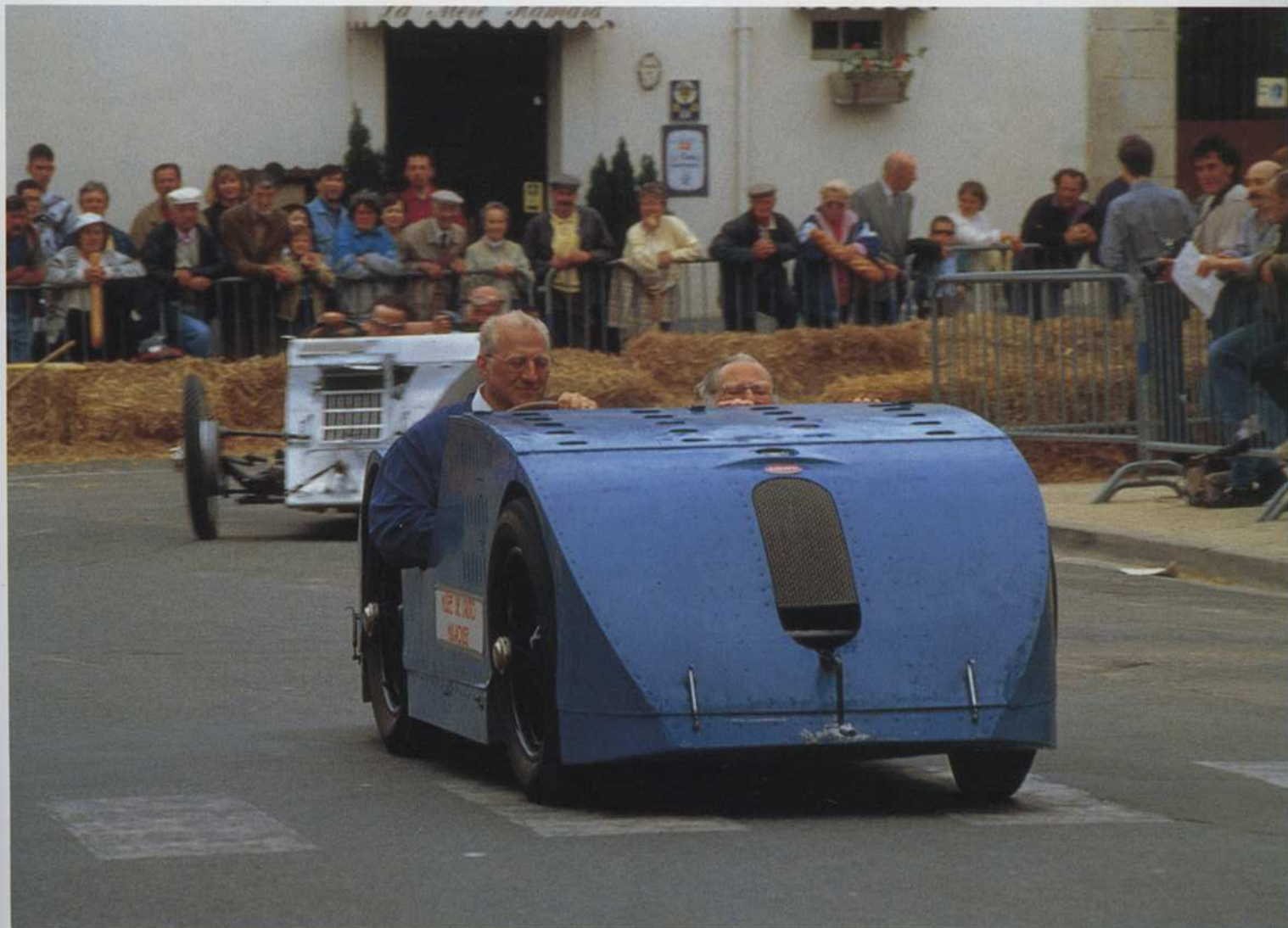


COMMEMORATION HISTORIQUE DU GRAND PRIX DE TOURS 1923/1993

70年前のACFグランプリ・レース再現

Tours, France, May 22-23, 1993

report=小林彰太郎 Shotaro Kobayashi photo=Robert César+Griffith Borgeson+CG



1923年ブガッティ T32“タンク”とヴォワザン・ラボラトワール。70年前このコーナーで同様なバトルが展開された。

5月中旬のある週末、ふだんなら眠ったように静かなロワール地方の小さな村、サンブランセーは、色も形も様々な古いレーシングカー、熱いオイルの匂いと凄まじいオープン・エグゾースト、それを見ようと近在の村々から集まった15,000人の熱気に包まれた。いまからちょうど70年まえの1923年、パリから西南へ約250kmほどにある、ここトゥールの町を巡るルート・ナショナルを閉鎖して、フランス自動車クラブ(ACF)がグランプリ・レースを主催した。この年は、ドラージュ、フィアット、サンビームなどの常連に加え、前衛的なブガッティとヴォワザンからも、空力的ホデ

イをまとったレーシングカーがデビューして話題を呼んだ。今年、それを記念する一大イベントが、地元の熱心な人々の手で開かれたのである。

イベントは2日にわたった。1日めはラリーで、早朝から夕方まで、まさに絵のように美しいロワール地方の田園を縫って走り、17世紀のシャトーや農機具博物館などを訪ね、昼はゆったりとワインを賞味しながら、ヴィンティッジから1960年代初期までの50台ほどが、のんびりとツーリングを楽しんだ。2日めはいよいよACFグランプリの再現である。オリジナルのレースは、1周約23kmの三角コースを800kmも走る長丁場だった。今回は

もちろんほんとうのレースではなく、元のサーキットのごく一部を使って走る高速パレードである。参加車は、1923年のグランプリに出場したGPレーシングカーだけではなく、同時代のGPブガッティも“賛助出演”した。また、戦前のスポーツカーやサイクルカー、スリーホイーラー、モーターサイクル、それにツーリングカーまでも、それぞれ別のクラスに分かれてコースを元気よく周回した。筆者はヴォワザン・ラボラトワールとブガッティ T32 タンクに同乗して、サーキットを飛ばすという貴重なチャンスを与えられた。写真により、このフランス的なイベントの模様をお届けする。



90°レフトハンダーを果敢にコーナリングするモーク氏のラボラトワール。サイドカー・レースのように、助手も身乗り出してバランスをとっている。実際には、低い重心と極端に硬いバネのおかげでほとんどロールしない。



期せずしていずれも“二次元的”な空力ボディをまとって現れたヴォワザン・ラボラトワールとT32 ブガッティ・タンク。



製作者／ドライバーのモーク氏とラボラトワールで5ラップしたら、エンジンの高熱で足の脛に火傷した。

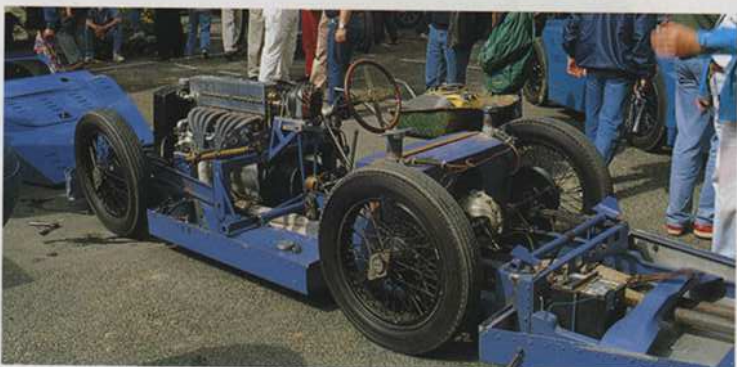


ミュルーズ博物館副館長ガルニエさんの隣りに乗った小林彰太郎。ホイールベース僅か2000mmと硬いバネにはサスペンションはちゃんと作用する。



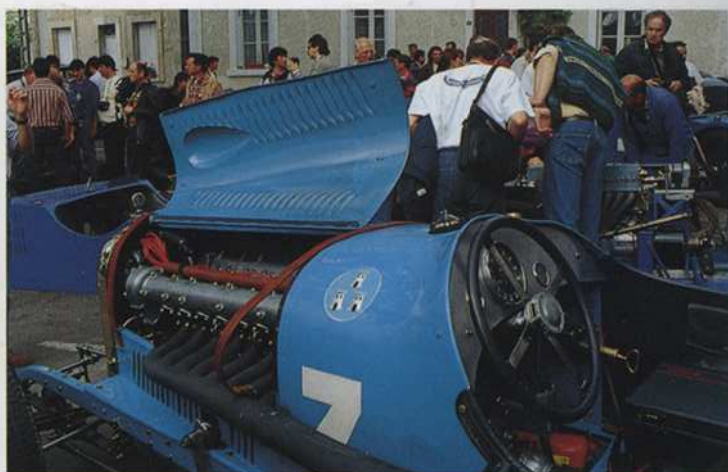
子供たちの天国。

バドックで素っ裸になったブガッティ・タンク。フロントもリアも前向きな以積円スプリングという、ブガッティとしては特異な設計。





狭いバックロードを行く、先頭は地元トールの名門ローラン・ピラン、



1922年ローラン・ピランの直列8気筒DOHC1998ccは非常に進歩的な設計で、110HP/5000rpm、エンブレムは名高いロワールの城を象徴する。



1923年ドラージュGPシャシーに、ムシュー・ベケというフランス人が後にイスパノ・スイザ航空V8エンジンを載せて高性能化を図ったスペシャル。



1927年ダルモン3輪車で頑張る老ドライバー。



サンブランセー村役場まえの広場が、昔のように今度もパドックとして使われた。